

1. むさしのクレスコースレ概要

(1) 事業目的

長期的な不登校状態の中学生（以下「生徒」という。）及びその家庭を対象に、『社会的自立』に向けた成長・発達に資する教育支援を状況に応じて行う。

そのために以下の点を重視しながら、具体的な活動内容は生徒たちの興味関心や課題に沿って実施する。

【居場所における学びの重要な要素】

居場所における学び	学びによりはぐくみたい力
意見や想い、立場の異なる他者と出会い、どのように共存していくのかをともに考えること。	・対話を通して関係を形成する力 ・互いに認め合う関係、安心していられる関係から生まれる自己肯定力
自分たちで取り組みを企画し、共同で成し遂げること。	・「今、ここ」を楽しみ、充実させる力 ・自治を通して学び、課題を主体的に解決していく力
様々な活動を通して、生徒が自分自身と社会を見つめなおし、それを表現する・受け止め合う機会を設けること。	・いろいろな世界に出会い、その情報や知識を活用する力、思考し想像し表現する力 ・「自分(たち)はどのように生きていきたいのか」を考える力

(2) 主な事業内容

①来室生徒の支援

居場所の運営、体験活動、個別相談、進路相談等を行なっている。

②訪問による支援

来所が難しい生徒を対象に、必要に応じて家庭、または公園や公共施設など生徒が安心して居られる場所への訪問支援を行っている。

③同行による支援

高校見学や説明会などへの同行支援を行っている。

④電話による相談

生徒、保護者の多様な相談に随時応じている。

⑤在籍校との連携

在籍校とは、生徒の日常の様子や進路指導について情報共有を行っている。

⑥関係機関との連携

各中学校、チャレンジルーム、通級指導学級、教育支援センターの相談部門、学校派遣相談員、スクールソーシャルワーカー及び子ども家庭支援センターとの連携に努めている。

(3) 運営団体と職員体制

むさしのクレスコーレの運営を行うのは、NPO 法人文化学習協同ネットワークである。同法人は、「人はもっとやさしくて、社会はもっと面白い」をコンセプトに、子どもたちの学習支援や不登校児童・生徒の居場所づくり、若者の社会参加や就労支援を行なっている。

令和3年度は4名の職員（統括指導員1名、常勤職員2名、非常勤職員1名）が担当した。

(4) 利用手順

生徒本人及び保護者がむさしのクレスコーレの利用を希望する場合は、まずはスクールソーシャルワーカーに問い合わせを行い、保護者相談を行う。その上で利用を希望する場合は、以下の手順で進める。

- ①保護者相談
- ②生徒見学または初回訪問支援
- ③生徒体験（通所または訪問支援を体験的に数回実施）
- ④入室申し込み

(5) 活動時間

火曜日から土曜日の午前9時から午後2時まで開所している。（春・夏・冬の一定期間休みを設定。）何時に来ても、何時に帰ってもよい。自分の体調やペースに合わせて、どのように来所しどのように過ごすのかは自分で決めることができる。

また午後2時以降、希望する生徒は同法人が運営する「フリースペースコスモ」（不登校の小中学生のための居場所）や「みらいる」（武蔵野市若者サポート事業。10代後半の若者のための居場所）の活動にむさしのクレスコーレの職員とともに参加することも可能である。

(6) 相談日

原則として、火曜日から土曜日の午前9時から午後5時までとし、日月祝日、年末年始の休日以外は担当者が常駐している。

2. 活動内容

(1) 保護者への支援

①保護者相談

令和3年度より、保護者からの相談の窓口は原則としてスクールソーシャルワーカーが担当する形をとった。スクールソーシャルワーカーが話を聞いた上で、保護者とクレスコーレ見学の方向で合意した場合には、初回の保護者面談を設定。初回保護者面談では令和2年度同様、これまでの経緯や本人の現在の様子、保護者と本人の希望等についてお話を伺い、クレスコーレがどのような居場所であるかということや、事業の理念について説明

し、今後についてともに考え、方向性を定める時間とした。また生徒入室以降も定期的もしくは適宜、保護者相談の機会を設けている。

②進路説明会・親の会

定期的に保護者の方の交流や意見交換の場を設けている。「進路説明会」では進路についての取組みや進路情報をお伝えし、「親の会」ではクレスコーレでの日常の取組みや生徒の様子について報告を行なっている。その上で後半は保護者の方々がお話をしたり、互いに交流したりする時間を設けている。本人や家族だけで孤立することのないよう、今後も継続的に実施していきたいと考えている。

(2) 来室生徒への支援

①個別相談

生徒の状況に合わせ、個別相談を定期的もしくは適宜行っている。いずれの面談においても、常に本人の意思を尊重し、主体的に物事を決めて行くための手助けをすることを心掛けている。特に令和3年度は定期的通所のある16名のうち11名が高校進学を目指す中学3年生であったため、進路に関する面談を丁寧に行った。

また、集団に入ることの難しい生徒に対しての個別相談や、高校受験に向けた学習を集団の中で行うことの難しい生徒に対する個別のフォローも行っている。

②居場所運営

生徒が安心して「居る・話す・学ぶ・活動する」ことのできる拠点としての居場所を運営し、生徒に寄り添った支援を行うことを目指している。その中で、自分の気持ちを見つめ直す・他者の思いを受け止める、などの社会性の育成等、社会的自立につながる取り組みを行なっている。決まったプログラムは設けておらず、月一回行っている生徒主体の予定決めで様々な企画が発案・実施されている。

令和3年度も七夕やハロウィン、クリスマスのパーティー、お菓子作り、進級・進学を祝う節目の会など、様々な企画を生徒とスタッフでともに作り、実施した。また「クレスコーレをより皆が気持ちよく過ごせる居場所にするには」をテーマにした「クレスコーレミーティング」など、話し合いを中心とした企画も実施した。

③体験活動

生徒同士の交流・協同の機会を生み出すような体験学習の場を作り出すことを目指している。その中で、非日常と出会うことへの意欲、主体的に「今」を楽しみ、充実させる力の育成につながるよう、生徒の希望や興味関心を活動に反映させている。

令和3年度は、農園での「野菜作りプログラム」がスタート。5月にはきゅうりとトマト、10月には大根、人参、いちごを植え育て、多くの収穫を得ることができた。生徒たちは各々家に持ち帰るだけでなく、クレスコーレ内で調理も実施し、収穫を楽しむことができた。

また同法人の運営する不登校の小中学生の居場所「フリースペースコスモ」との合同企

画として、「コスモ」に通う小中学生を交えて井の頭公園にて「逃走中」（あらかじめ準備したミッションクリアを目指す鬼ごっこ）を実施。

さらに外出企画として、国立科学博物館や三鷹の森ジブリ美術館、同法人が神奈川県相模原市にて運営する「ニローネ風のすみか農場」など、様々な場所に出かけ、体験をともにすることができた。

④進路相談・進路支援・学習支援

生徒自身がこれまでの経験を踏まえ、“自分はこれからどのように生きていきたいのか”ということを中心に考えることが重要と考えている。さらに「自身で進路を選択すること」「仲間とともに進路を考えること」を大切にしながら、年度を通して進路支援に取り組むとともに、1、2年生も含めて希望に応じ学習支援・進路サポートを行っている。

令和3年度は中学3年生が13名在籍。うち11名は居場所への定期的な通所があった。全員が都立チャレンジスクール、通信制高校など、希望する高校に進学することができた。

具体的な支援内容は以下の通り。

ア 進路についての話し合い・「先輩」との出会い

10月、令和2年度クレスコーレに通い、チャレンジスクールへと進学した高校1年生の二人を招いて、「OBOGを囲む会」を実施した。

また同月、「進路について話す会」も実施。高校進学に向けての不安や希望を話し合った。

イ 高校見学への同行参加

チャレンジスクールへの見学会や、「通信制高校・サポート校合同相談会」への同行参加を行った。また個別に学校説明会への同行を行った。

ウ 面接・作文練習・志願申告書作成

10名に対し、受験に向けた作文練習・面接練習のどちらか、もしくは両方を実施。いずれも、志望動機や高校生活への思いなど、話をしながら内容を深めていくことを心掛けた。

エ 学習支援

生徒たちが希望した際には居場所で学習ができるようにし、スタッフがサポートを行った。また生徒の要望を受け、年度後半には週一回「作文・勉強タイム」を設けた。

(3) 来所が難しい生徒への支援

①訪問支援

来所が難しい生徒の場合は、生徒が無理なく出会える場（生徒の自宅等）へ訪問し、相談活動や学習支援を行うことを通じて職員との信頼関係を構築し、通所へとつなげられるよう努めている。訪問のペースや過ごし方については生徒の希望に応じて、相談して決める。また家庭訪問からむさしのクレスコーレへ一緒に向かったり、家庭訪問から一緒に外出したりすることも可能である。

令和3年度は2名に対し訪問支援を実施した。

②電話による支援

来所・訪問が一時的に途切れる場合には、保護者または生徒本人に電話・メールにて連絡を行う。状況を把握し、必要に応じた支援を行う。

また保護者や本人とも連絡のとりづらいケースの場合は、スクールソーシャルワーカーなど関係機関と情報共有を行い、状況を把握し、関係機関とともに方策を考えながら支援を進めている。

(4) 令和3年度実施行事

年・月	内容
令和3年4月	「野菜作りプログラム」スタート(畑作り)
5月	親の会/野菜の植え付け
6月	「逃走中」/保護者向け進路説明会
7月	七夕パーティ/野菜の収穫/外出企画「井の頭自然文化園」
8月	外出企画「国立科学博物館」
9月	都立世田谷泉高校見学/外出企画「多摩六都科学館」
10月	OBOGを囲む会/「通信制高校・サポート校合同進学相談会」参加/野菜の植え付け/ハロウィンパーティ
11月	外出企画「ニローネ風のすみか農場」/親の会
12月	野菜の収穫/クリスマスパーティ
令和4年1月	中三デー(中三のみ年始に二日間集まり受験対策)
2月	「みらいる」説明会
3月	親の会/外出企画「ニローネ風のすみか農場」「ラウンドワンでボウリング」/節目の会

3. 相談の現況

(1) 令和3年度入室生徒数

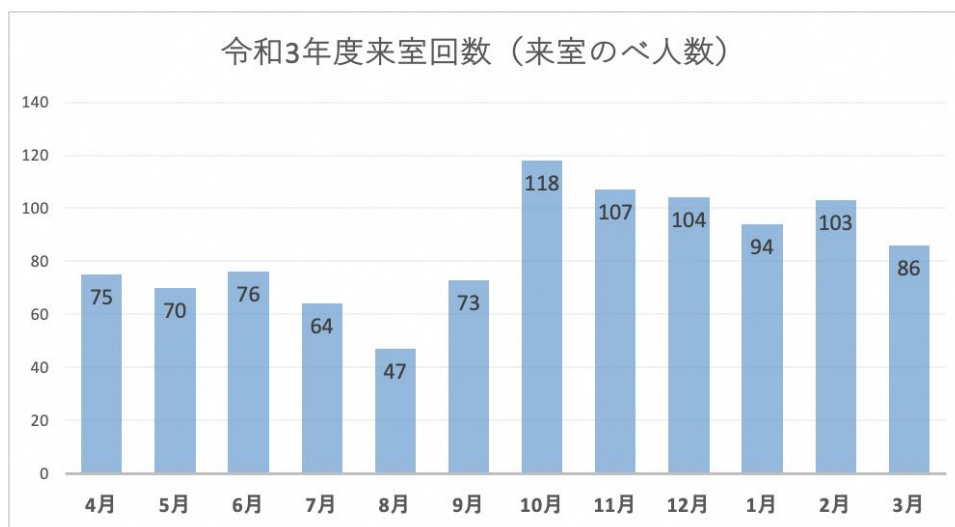
	令和2年度継続	新規	合計
中学生	9	12	21

(2) 令和3年度来室生徒数

4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	計
8	7	8	11	8	10	15	14	13	12	11	12	129

(3) 令和3年度来室回数(来室のべ人数)

4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	計
75	70	76	64	47	73	118	107	104	94	103	86	1017



（４） 令和3年度家庭訪問支援回数

4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	計
0	2	5	7	5	5	5	3	2	3	3	3	43

（５） 令和3年度電話・メール相談回数

4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	計
19	11	9	8	16	16	16	32	15	13	18	24	197

（６） 利用状況

令和3年度、入室している生徒21名中16名はむさしのクレスコーレ居場所に定期的に通所し、4名は定期的な通所はなかったが保護者と連絡を取り合うなど関係性の継続を行なった。生徒の通所頻度については、毎日朝から通所する生徒、週1～2日通所する生徒、体調に合わせて昼頃通所する生徒など多様であった。中学3年生13名全員が高校進学をした。

21名中2名は訪問支援を行い、内1名は約5か月間の訪問支援を経て、徐々にクレスコーレに来所するようになった。もう1名は訪問支援を継続、スタッフが生徒の趣味の世界を共有し、楽しむ時間を重ねることで信頼関係を築いている。

生徒本人の入室にすぐには至らない場合でも、体験期間の延長や個別対応を行うなど、生徒のペースや体調に合わせた対応をとっている。また保護者に対しても、保護者面談の継続や親の会への誘いかけを行うなど、「繋がり続ける」ことを大切にしている。

いずれの場合においても、生徒本人の意思が尊重されることが重要であると考えており、保護者や在籍校、スクールソーシャルワーカーと情報共有を行ないながら、連携して支援を行なっている。

(7) 中学生の進路状況

	令和2年度	令和3年度
都立定時制高校（チャレンジスクール含む）	3名	8名
私立全日制高校	1名	1名
私立通信制高校	0名	4名
合計	4名	13名

4. 研修

日時	研修テーマ及び内容
令和3年4月24日（土）	法人内フリースクール事業部会
令和3年12月11日（土）	法人全体研修
令和4年1月6日（木）	法人内フリースクール事業部会
令和4年3月31日（木）	法人内フリースクール事業部会

5. 全体を通して

(1) 居場所運営について

令和3年度も令和2年度同様、決まったプログラムや来所時間を設けず、生徒主体の居場所作りを心掛けた。月に一回実施した「予定決め」では、話し合いに不慣れで集中が難しい生徒の姿も目立ったが、積み重ねの中で「自分たちで決める」文化が少しずつ浸透していった。生徒発案の様々な企画や日常をともにする中で、通所を始めたばかりのメンバーを先輩にあたるメンバーが意識して誘い入れる姿や、スタッフがいらなくてもメンバー同士で話し合い遊びを成り立たせていく姿が見られるようになり、気持ちを表現しやすい環境がかれらの手で作られようとしていることが感じられた。また、「クレスコーレミーティング」や日頃のおしゃべりの中で、不登校になった時の気持ちや人間関係のしんどさなどについて語られる場面が複数回見られ、「自分の話が否定されず聞いてもらえる」という安心感が居場所の中に醸成されつつあることを実感することができた。

(2) 進路相談・進路支援

令和3年度は前述の通り中学3年生が多く、全員が高校進学を目指していた。10月の「OBOGを囲む会」では、二人の先輩が受験時の思いや入学後の生活について、資料を用いて詳細に話をしてくれ、生徒たちからは活発に質問も出て、大いに参考になった様子だった。また学校見学やその感想交流などを通して高校生活をイメージし、そこに向けての不安や希望を言葉にする時間を持った。それぞれの進路選びに伴う葛藤を支えつつ、作文練習や面接練習では志望動機や高校生活への思いなど、話をしながら内容を深めていくことを心掛けた。年始の閉所期間中には2日間の「中三デー」を実施し、受験準備を集中して行った。生徒同士も面接の答えを一緒に考えたり、作文を読みあったりなどを通してお互いへの理解を深めたり、同じ場所でもともに受験に向き合うことで自然と互いに励ましあう関係を作っている様子であった。3月には全員が合格を決め、ともに喜び合うことができた。

(3) 訪問支援について

令和3年度は2名に訪問支援を実施。うち1名は令和2年度から体験来所を何度かしていたものの、一人で来ることが難しい生徒だった。令和3年度6月から訪問を開始、10月からは家に迎えに行きクレスコーレまで同行するという形を取り始め、継続したところ、居場所で安心して過ごせるようになるにつれ同行の必要がなくなり、12月以降は一人で来所するようになった。

(4) 体験活動について

農園での野菜作りプログラムでは、植える前の準備はもちろん、何を植えるかを決めること、苗を買いに行くこと、調理のメニュー決めやレシピ調べなど、すべてメンバーとスタッフとでともに行った。プログラムへの参加に積極的でない生徒もおり、活動が停滞することもあったが、進め方や続けるかどうかについても適宜話し合いをしながら進めた。年度後半には、自ら水やりに行ったり、冬休みの間も様子を見に来る役を買って出たりと、徐々に主体的に野菜作りにかかわれるようになっていく姿も見られた。

また「お出かけ企画」でも、行く場所や待ち合わせの仕方、過ごし方など、できるだけ話し合いによって決めるようにした。特に11月と3月に実施した「ニローネ風のすみか農場」(神奈川県相模原市にある、同法人の運営する農場)への「お出かけ」では、行った先で何をするかも含めて話し合いにより決めていった。その他にも様々な場所に出かけたが、いずれにおいても、非日常を楽しみ、普段よりも生き生きとしたメンバーの姿を見ることができた。普段はあまり交流のないメンバー同士が協同で作業したり、活発に会話を交わす様子が見られ、数か月通所のなかったメンバーが「お出かけ」への参加をきっかけに通所を再開することもあった。「お出かけ」という非日常が生み出す心身の躍動感、開放感がもたらすものは大きく、今後も積極的に実施していきたい。